

西本願寺境内の庭園遺構

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

西本願寺と東本願寺は、七条通の北側、堀川通と烏丸通に面して壮大な門構えを誇る寺院です。どちらも築地塀に囲まれた広い境内に、瓦葺きの大きな建物が建ち並び、毎日、多くの参拝者が訪れています。京都の人々からは「お西さん」「お東さん」と呼ばれて親しまれ、観光客で賑わう他の寺院と比べると、庶民的で身近な印象を受けます。

ところで、現在は西と東に分れています。もともと文明十二年(1480)、蓮如が京都山科に建立したひとつの「本願寺」でした。戦国時代には、一向一揆を起すまでの一大勢力となり、織田信長とは大坂石山合戦で元亀元年(1570)から約10年にわたって戦いました。その後、本願寺は紀伊鷺森、和泉貝塚、大坂天満と、次々に移転を繰り返しました。

その後、豊臣秀吉が行なった京都の都市整備計画に基づき、蓮如から3世のちの顕如が七条堀川を選定、天正十九年(1591)に現在の西本願寺の地へ移転してきたのです。この時にはまだ、ひとつの「本願寺」でした。

文禄元年(1592)顕如の没後、いったんは長男の教如が宗主を継ぎましたが、翌年には秀吉の命により弟の准如にその地位を譲りました。そして教如は寺域の北東隅、

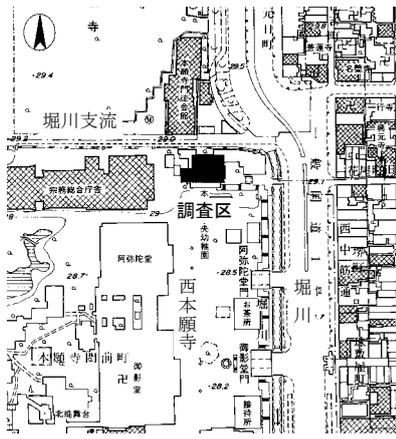


検出した池跡(西から)

花崗岩の切石が横たわっている部分が「瀬」にあたる。奥の建物は太鼓楼。

本堂の北に隠居することになったのです。隠居後も教如は多くの門徒に慕われ、屋敷内には御堂や玄関、台所なども造られ、家構えが整えられていったといわれます。教如自身も隠居していたとはいえ、宗主としての自覚を持っていたのでしょう。

このような経緯ののち、教如は徳川家康により烏丸六条から七条の地を寄進され、慶長七年(1602)にここに移り、堂舎の建築を始めました。これが現在の東本願寺の場所にあたります。この時から本願寺は「西」と「東」に分かれ、今日に至っているのです。



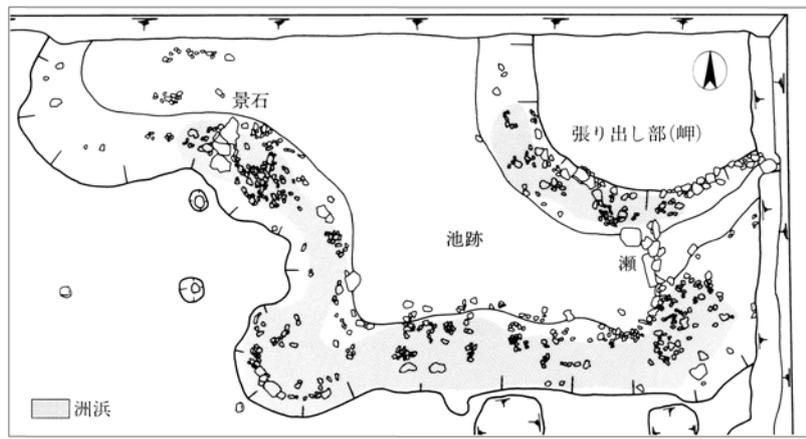
調査位置図 (1 : 5,000)

さて、今回西本願寺の境内で発掘調査を実施したところ、本願寺が移転してきた頃の庭園に伴う池を調査区の北東角で検出しました。この場所は、長い間、藪地であったために、池跡は後の時代の遺構に削平されることなく、大変よい状態で残っていました。

池の汀は拳ほどの大きさの石を敷き詰めた洲浜をなし、西端のややくびれた部分には、三つの大きな石を用いた景石を配しています。北側には盛り土をした張り出し部を形成し、この部分と南の洲浜を結び堰となるよう石を積み上げています。池に水を引き入れる際、段差をもって流れ落ちるように工夫された「瀬」にあたります。

この池に利用された水は、東を流れる堀川から引き入れ、当時はすぐ北を流れていた堀川の支流（現花屋町通）に排水されていたようです。水は「瀬」を落ちて洲浜の石をひたひたと濡らし、よどむことなく穏やかに流れていたことでしょう。

同じ頃、武家屋敷や禅宗寺院に造られた、豪壮な印象の池に比べると、平安時代の浄土式庭園に近い優雅な印象を受けます。庭には



池跡平面図 (1 : 200)

その持ち主の趣味や嗜好が反映するといいます。この池は、果たしてどのような人物の感性が表われているのでしょうか。

調査区は境内の北東隅に位置し、ちょうど、教如が隠居していた屋敷があったとされるあたりです。出土した遺物から、この池は16世紀末頃に造られたと考えられ、教如が隠居生活をしていた時

期と一致します。教如の屋敷内に池があったことを示すような史料は残っていませんが、一度は本願寺の宗主についての教如の屋敷に庭園があったことは、十分に想像できることでしょう。隠居しながらも、多くの門徒に慕われ、教如はこの庭を眺めながら、本願寺の行く末に思いをめぐらせていたのかも知れません。（近藤 知子）



洲浜のようす（東から）拳大の礫を汀部分に密に敷き詰めている。